

## 22 国 語

(解答番号  ~ )

※国語は「経済経営学部」および「人文学部」は必須。  
「健康医療学部」および「バイオ環境学部」は選択。

次の文章は、著書『日本美の再発見』で知られるドイツ生まれの建築家ブルーノ・タウトについて記したものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

タウトは一九三三年五月三日に日本に到着したが、そのすぐ翌日である五月四日に桂離宮を観覧している。桂離宮の建築や庭園のありようを分析したタウトは、そこに日本のシンセイなる美を見いだし、かの有名な「実に泣きたくなるほどの美しさである」という激賞の言葉を残した。桂離宮は、タウトの日本文化論の中で最も重要な位置を占めるものであり、彼が発見した日本美の象徴とすべきものであった。

タウトが著述の中で桂離宮の美を絶賛したことにより、桂離宮は日本美の典型として広く知られることとなった。と同時に、タウト自身が日記の中で自負している通り、彼もまた日本美の発見者として、日本人によって認知されることとなったのである。

ここで重要なのは、桂離宮を発見した人物として強く印象づけられたのが日本人ではなく、外国人のタウトであったという事実である。タウトの日本文化論の中心に位置する桂離宮は、日本の建築物として古くから存在し、日本人に広く知られていた。(Ⅰ)、その美を発見したとされるのが外国人であった、という点に注意すべきなのだ。タウトは桂離宮の美を「ヨーロッパ人の眼にはまったく特殊な新しい美——即ち何ものにも比べることのできない絶対に日本的な美である」と述べていたが、タウトによる桂離宮の発見が日本においてとり沙汰されたのは、日本の美が外国にはない独自のものとして、ほかでもない外国人のまなざしを通してホシヨウされたという意味合いにおいてであったと考えられる。

タウトが来日した一九三〇年代は、日本において国粹主義が高まりを見せていた時期であった。一九三一年には満州事変が起こり、日本はナショナリズムへとケイトウしてゆく。そうした時期に来日したタウトが、外国人として日本の美を発見し、賞賛したとなれば、それが日本人によってさかんにもてはやされるのは時代の必然とでも言うべきことであつたらう。(Ⅱ)、タウトが日本を発見したというイメージは、日本を覆っていた国粹主義的なイデオロギーのもとで作り上げられたものであった、ということになる。

こうした観点からタウトや桂離宮を分析した興味深い著書として、井上章一の『つくられた桂離宮神話』が挙げられる。井上は、日本においてタウトの著作がいかにして受け入れられた

か、また桂離宮がいかなるものとして位置づけられていたのかを詳細に分析している。それによれば、タウト以前にも桂離宮を賞賛する日本人は多くいたにもかかわらず、タウトが桂離宮の発見者としてはやされた背景には、当時の日本建築界におけるモダニズムの隆盛があったという。日本のモダニストたちは、高名な建築家であるタウトに桂離宮を激賞させることによつて、簡素な構成美を重んじるモダニズム運動をさらに加速させようともくろんでいたというのだ。

(Ⅲ)、当時の日本文化論において日本固有の美が模索されていたことも、タウトの名声とかかわっているという。タウトによる桂離宮の発見は、日本建築界におけるモダニズムの隆盛や、日本固有の美を発見しようとする日本文化論の流れに基づいて作り上げられたストーリーだったのだ。当然、モダニズムや日本文化論だけでなく国粹主義もまた、都合よくタウトを歪曲し、解釈する要因だったということになる。日本や桂離宮の発見者であるというタウトのイメージは、日本人によつて作り上げられた物語によるものなのである。

こうした物語が構築された原因は、タウトの著作を日本人が(半ば意図的に)誤読したことにある。タウトの著作をしっかりと読めば、彼の日本論が国粹主義とはかけ離れたものであるということはあきらかだ。タウトが問題にしていたのは、日本が外国の文化をむやみやたらと模倣することであつて、外国の文化をとり入れること自体ではなかった。「日本が外国産の植物を自国の土壌に移植するに適する条件を発見するまでには、これからもまだ何遍となく錯誤を犯さねばなるまい。それだから、外国の文物に向う波頭と《日本主義》という反動のいざよう深い波谷とは、今後も長い年月に互つて参差交錯するであろう」というタウトの言葉は、日本なるものをいたずらに賛美する国粹主義と、タウトの日本論との間にある深い断絶を感じさせずにはおかない。

しかしながら、タウトの著作自体にも、日本のイデオロギーと呼応しやすい側面があつたことは否定できない。

タウトの著作を一読すればすぐに気づくように、彼の論は二つのものを対比しながら展開する、いわゆる二元論的な枠組みで語られる点に特徴がある。たとえば、タウトは桂離宮の簡素な美を賞賛する一方で、それと対照的なものとして日光東照宮を挙げ、中国的な過剰装飾が施された醜い建築物として酷評している。ここには日本／中国という二元論的発想が色濃く表れ

ていると言えよう。のみならず、ここに天皇／将軍、神道／仏教といった二項対立まで重ねられており、「／」より上のものが肯定され、下のものが否定されるというパターンによって、日本建築の肯定すべきもの／否定すべきものが分別されてゆく。

こうした構造が、国粹主義的なイデオロギーと親和するものであるということはあきらかだろう。言いかえれば、タウトの論法そのものが日本のイデオロギーと呼応しやすく、都合よく利用されかねないものであったということである。<sup>d</sup>

タウトの文化論の本質は、国粹主義とはかけ離れたところに位置していた。(Ⅳ)、二元論的発想による明瞭な論理展開が、タウトの著作を日本のイデオロギーと親和させる一要因となり、その結果、外国人であるタウトが日本の国粹主義を後押しする主張をしたかのように曲解されてしまったのである。

結果として日本のイデオロギーと呼応し、曲解されてしまったタウトの日本論であったが、実はタウト自身も、自らの論をある種の物語として構成しようとする論者であった。

その傾向が色濃くカンシユ<sup>c</sup>されるのが、『日本の家屋と生活』(以下『家屋と生活』)という著作である。タウトが自らの日記の中で述べているように、この著作は一つの物語として書かれている。すなわち、事実とは異なる虚構を含みながら、一つの筋に沿って構成されたものだということである。同書の訳者解説を記した篠田英雄が指摘するように、そもそも三月の下旬に汽船で横浜に到着したという記述からして虚構であり、実際にはタウトは五月三日に敦賀に上陸している。また、タウトは一九三三年五月から一九三六年十月までの三年あまりを日本で過ごしたが、同書の記述では三月下旬に日本を訪れ、そこから約一年後の五月には日本を離れたことになっている。さらに、タウトが実際に高崎市外の洗心亭で暮らし始めたのは一九三四年の八月だが、同書では三月下旬に日本に到着した直後、高崎市外へと移動したことになる。

時系列に関するこうした諸々の虚構は、洗心亭を生活の拠点としながら、約一年間の周遊や調査によって日本の家屋と生活に関して知見を深め、その後日本を去るといふ物語として構成すべく、作為的に企図されたものであったと思<sup>おぼ</sup>しい。あるいは、「夏」や「太陽と炭火」など、季節感とのかかわりから日本の生活や家屋の特徴を記した章があることも関係しているのかもしれない。いずれにせよ、タウトがなんらかの意図を持って虚構を駆使し、物語を紡ごうと

していることは明白だ。タウトによる日本の発見が日本のイデオロギーの中で生み出された物語であることは先に確認したが、タウト自身もまた、卓越した物語の紡ぎ手だったのだと言えよう。

(V)、『家屋と生活』に散りばめられた虚構の中でも特に注目しておきたいのは、桂離宮を観覧した時期に関するものである。

タウトが桂離宮を観覧したのは一九三三年五月四日、すなわち日本に到着した翌日であったが、同書においてはまったく異なる時期に観覧したことになっている。ここに、タウトが同書において企図した物語にとつて最も重要な仕掛けが施されていると思しい。

もう少し詳しく見てみよう。『家屋と生活』は序を含む十三章から成るが、その最後には桂離宮の観覧について記した「永遠なるもの」が置かれ、その一つ前には「転回点」という章が置かれている。「転回点」ではタウトが日本に一年間滞在した翌春に妻とともに京都を訪れ、そこで鈴木という人物と文化について議論するということできごとが語られている。その章の末において、鈴木氏から「桂離宮はいかがでした」と尋ねられたタウトは、「いや、まだ桂離宮は拝観していません」とはっきり述べている。これはあきらかな虚構である。先に述べた通り、現実のタウトは日本に到着した翌日に桂離宮を観覧していたはずだ。

なぜこのような虚構が仕掛けられているのか。それは、桂離宮との出会いを真の日本文化の発見として位置づけ、日本での暮らしにおける最後の最後によくシンセイの日本美を見つけて出したということを強調するためであったに違いない。

このことは、「転回点」と「永遠なるもの」との対応関係を見ればあきらかである。「転回点」における鈴木氏との議論の中でタウトは、西洋の概念をむやみに輸入することによって、真の日本的な文化が失われてしまうことを危惧している。そして、「何が真の日本なのか」と鈴木氏に問いかけている。その問いに対する答えとして置かれたのが、桂離宮について述べた「永遠なるもの」という章であった。「永遠なるもの」の中に「私達は今こそ真の日本をよく知り得た」という記述があることは、そのなによりのショウサであると言えよう。要するにタウトは、「転回点」で「真の日本とはなにか」という問いを設け、「永遠なるもの」で真の日本文化を桂離宮に見いだすという物語を描こうとしていたのである。

とすれば『家屋と生活』は、一年を通して真の日本文化を探求してきたタウトが、桂離宮を

訪れることによってようやく真の日本文化を見つけ出すという物語として読むことができよう。言ってみれば、それは外国人が一年の間日本で暮らすことによって日本を理解してゆくという、成長物語としての趣を持っているのである。このようにして見ると、『家屋と生活』における物語の主人公タウトは、日本の発見者というよりも、一年の間真の日本を探し続けた日本の探求者と呼ぶのがふさわしい人物であるように思われる。

タウトという人物にはさまざまな物語がつきまとっている。本稿で見たかぎりでも、片や日本の発見者として、片や日本の探求者として語られているのがタウトという人物だと言えよう。もちろん、この二つの物語は別個のものではなく、お互いにかかわり合っているだろう。しかし、タウトが日本を発見するために真の日本を追い求め続けたという事実を、我々は決して忘却してはならない。

タウトの功績が今なお偉大なのは、単に彼が日本を発見したことによるのではない。日本を発見したことによってのみタウトが評価されるとしたら、それは日本における諸々のイデオロギーが作りだした物語に沿うことでしかタウトを理解できていないということになる。重要なのは、ときに日本文化の衰退してゆくありように絶望し、いら立ちすら感じながらも、それでもなお真の日本なるものを探求し続けたということなのだ。

二〇二〇年に東京オリムピックを控えた現代日本において、これから外国人がさまざまな日本を発見し、それにより日本人もまた新たな日本を発見することになるだろう。そうした事態が予見されるからこそ、その発見が耳に心地よだけの物語とならないよう、細心の注意を払う必要がある。たとえ発見されるものの醜さやふがいなさに絶望を抱いたとしても、それでもなお日本なるものを探求し続けようとすることができるのか。タウト自身が紡いだ物語は、我々にそう問いかけている。

（水野雄太「ブルーノ・タウト」による）

問一 文中の傍線部A～Eに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、Aが①、Bが②、Cが③、Dが④、Eが⑤。

A ホシヨウ

- ① ザイシヨウ感を抱く
- ② バイシヨウを請求する
- ③ 事実をリツシヨウする
- ④ 功績をヒヨウシヨウする
- ⑤ 提案をシヨウダクする

B ケイトウ

- ① 家屋のトウカイ
- ② クントウを受ける
- ③ 前例のトウシユウ
- ④ 銀行のトウドリ
- ⑤ トウセイが取れる

1

2

C カンシユ

- ① シュカンの
- ② 党のシユハン指名
- ③ 改革のキシユ
- ④ 事情チヨウシユ
- ⑤ 陣地をシシユする

D シンセイ

- ① 文化のセイズイ
- ② セイシヨを読む
- ③ セイノウが良い
- ④ セイタイ肝移植
- ⑤ 公明セイダイ

3

4

E シヨウサ

- ① 遠国へのサセン
- ② 警察のソウサ
- ③ わずかのゴサ
- ④ 年齢サシヨウ
- ⑤ 眞実をシサする

5

問二

傍線部 a～e の文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、aが 6、bが 7、cが 8、d

が 9、eが 10。

a 国粋主義

6

- ① 自国の利益だけを優先して追求する姿勢
- ② 自国の伝統的個性をむやみに賛美する考え
- ③ 自国のすべてにおける優秀性を強調する主張
- ④ 自国の権威に固執しそれを守ろうとする立場
- ⑤ 自国の文化から異文化を排除しようとする運動

b 発見

7

- ① まだ誰も知らなかったものを初めて見つけた
- ② まだ誰も指摘していなかった価値を見いだした
- ③ まだ広く知られていなかったものの存在を知った
- ④ 存在が不明とされていたものを探求の結果見つけた
- ⑤ 世間では無価値とされていたものを再評価した

c 参差交錯する

8

- ① 隔たりがある
- ② 行き来する
- ③ くいちがう
- ④ かなわない
- ⑤ 入り混じる

d 利用されかねない

9

- ① 利用されるおそれがある
- ② 利用される見込みがある
- ③ 利用されるかもしれない
- ④ 利用されることが止められない
- ⑤ 利用されることができない



e 成長物語

10

- ① 苦しみの中で成熟の境地にたどり着く小説形式
- ② 時間の流れの中で心身ともに育ってゆく筋書き
- ③ 試練を経ながら目的の達成に近づいてゆくストーリー
- ④ 周囲の環境の助けにより精神的に大人になるドラマ
- ⑤ 与えられた難問の答えを解明するまでの苦難の展開

問三

文中の空欄（Ⅰ）～（Ⅴ）に入る最も適当な語句を、次の各群の①～⑤のうちから、

それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、（Ⅰ）が 11、（Ⅱ）が 12、（Ⅲ）が

13、（Ⅳ）が 14、（Ⅴ）が 15。

11 （Ⅰ）

- ① むしろ ② いっぽう ③ そして ④ やはり ⑤ にもかかわらず

12 （Ⅱ）

- ① もちろん ② 要するに ③ 短く言えば ④ おそらく ⑤ もしくは

13 （Ⅲ）

- ① ところが ② だから ③ とすれば ④ また ⑤ とはいえ

14 （Ⅳ）

- ① しかし ② むしろ ③ ところで ④ 結局 ⑤ つきつめれば

15 （Ⅴ）

- ① また ② ののみち ③ さて ④ 言ってみれば ⑤ そのうえ

（次頁に続きます）

問四 傍線部ア「ここで重要なのは、桂離宮を発見した人物として強く印象づけられたのが日本人ではなく、外国人のタウトであったという事実である」とありますが、筆者がこの事実を重要だと考える理由は何ですか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

16。

- ① 外国人であるタウト以前に桂離宮の日本美を称賛した日本人がいなかったことに対して、当時の国粋主義者が深く反省したことを示しているから
- ② 外国人であるタウトが桂離宮の日本美を称賛したことで、当時の日本人が自負心をくすぐられて国粋主義に目覚め、時代が大きく動いたことを示しているから
- ③ 外国人であるタウト以前にも桂離宮の日本美を称賛した日本人はいたはずで、当時から日本人が外国人の言葉に影響されやすかったことを示しているから
- ④ 外国人であるタウトが桂離宮の日本美を称賛したことを、当時の日本人が国粋主義の客観的な裏付けとして利用し強調したことを示しているから
- ⑤ 外国人であるタウトが桂離宮の日本美を称賛したことは事実ではなく、国粋主義を掲げる当時の日本人による捏造<sup>ねつぞう</sup>であることを示しているから

問五 傍線部イ「井上章一の『つくられた桂離宮神話』の指摘した内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

17。

- ① 二〇世紀初頭の日本建築界において、主流派と反主流派が思想的に争ったこと
- ② 桂離宮の建築様式が日本固有の美意識を象徴していること、詳細な分析
- ③ 高名なタウトによる評価が、日本建築界の思潮への助けになると考えられたこと
- ④ タウトに助言して、ことさらに日本独自の美を発見させようとした人々の動向
- ⑤ タウトの著作は、実は日本特有の美を求める日本人思想家が執筆したものであること

問六

傍線部ウ「外国の文物に向う波頭と《日本主義》という反動のいざよう深い波谷」とありますが、それぞれ何の比喩にあたりますか。最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、

18

と  
19

18

外国の文物に向う波頭

- ① 外国文化の度を越した模倣
- ② 外国の文化をとり入れること
- ③ 外国産の植物の日本への移植
- ④ 異文化受容の試行錯誤
- ⑤ 外国の文化に対するあこがれ

19

《日本主義》という反動のいざよう深い波谷

- ① いたずらに日本固有の美を追求する考え方
- ② タウトの日本論と国粹主義との間の断絶
- ③ 外国産植物の日本への移植を断念すること
- ④ 日本的なものへの過剰な称賛による外国批判
- ⑤ 国粹主義に従った異文化排除

問七

傍線部エ「タウトの著作自体にも、日本のイデオロギーと呼応しやすい側面があった」として著者が示していることの内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

20

- ① 二つのものを対比しながら展開する論法で、中国的なものを激しく否定した。
- ② 物事を二者に分別する枠組みで語り、日本固有のものばかりを肯定した。
- ③ 読者に二者択一を迫る論法を基本とし、日本建築にも日本らしさを推奨した。
- ④ 日本建築の中に様々な二項対立を見出し、日本と中国の相違点を示した。
- ⑤ 曖昧さを排除した二元論を用い、日本の国粹主義を肯定すべきものとした。

問八 傍線部オ「卓越した物語の紡ぎ手」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、21。

- ① 自らの著作を、虚構だけを組み合わせた仮想世界として構成した、個性的な論者
- ② 自らの著作を、事実ではないことを散りばめて、より印象的に作り上げている論者
- ③ 自らの著作を、細かい事実は曲げてでも一つの筋となるようにまとめた、技巧的な論者
- ④ 自らの著作として、論文以外に小説など虚構の類までを著している多芸多才な論者
- ⑤ 自らの著作を、論文と小説の中間に位置するものに作り上げた、型破りな論者

問九 本文全体を通じて筆者が述べているタウト像とは、どのようなものですか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、22。

- ① 「日本の発見者」というよりも、一年の間真の日本を探し続けて著作を著した「日本の探  
究者」
- ② 日本の国粹主義者から「日本の発見者」としてまつりあげられたが、実際は日本の文化受  
容のありかたを深く憂いていた「日本の探究者」
- ③ 日本のイデオロギーから「日本の発見者」とされたことを契機に、日本文化の実情を心配  
してその保護に努めた「日本の探究者」
- ④ 日本の建築界から桂離宮を再発見した「日本の発見者」とされてから、再び日本文化に向  
き合って真の日本文化を考え続けた「日本の探究者」
- ⑤ 日本の思想の流れの中で「日本の発見者」と位置付けられた一方、日本文化の衰退を感じ  
つつ真の日本を凝視し続けた「日本の探究者」

問十 本文全体における筆者の主張として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は、

23。

- ① 日本文化に対しては、現代はもちろん将来においても、それに興味を抱いてくれる外国人の存在が支えとなるので、そうした外国人を増やすためにも、彼らの意見を日本側の都合によって曲げることなく、尊重すべきである。
- ② 日本文化を闇雲に称賛する風潮は、過去から現在にわたって外国人と日本人の両者において見受けられたが、結局は日本文化を衰退させることになるので好ましくなく、冷静な批判力やそれを受け止める度量の広さこそが重要である。
- ③ 外国人にせよ日本人にせよ、真の日本文化を探求しようとするれば、時には目を背けたくない真実を発見することもあろうが、それでも続けなくては真の探究者にはならず、日本文化を発見することもできない。
- ④ 日本人が外国人の日本批評を自分の都合や好悪でゆがめて利用することは間違いであり、批判的な指摘も含めて彼らの真意を尊重することこそが、外国人と日本人の両者による真の日本文化の探求と発見につながる。
- ⑤ 日本文化に関心を抱く外国人は日本社会の理解を得てこそ日本文化をより探求でき、一方日本社会は先進文化を持つ外国人に称賛されたことでより日本文化の優秀性を確認できるの  
で、双方は互いに依存しており、今後もこの関係が続けるだろう。

(次頁に続きます)

二

次の問一～問三に答えなさい。

問一 次のA～Eの慣用的表現の空欄に最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、24 ～ 28。

24

A ( ) 下の交渉が進む

- ① 表面 ② 海面 ③ 断面 ④ 水面 ⑤ 覆面

25

B それまでの苦労が ( ) を結ぶ

- ① 実 ② 身 ③ 露 ④ 縁 ⑤ 果

26

C 哀悼の ( )。

- ① 意を整える ② 意を称する ③ 意を表する ④ 意を助ける  
⑤ 意を念ずる

27

D ( ) 抜けるような賢さ

- ① 左の耳から右の耳へ ② 目からうろこが ③ 目には目を  
④ 頭から足の先まで ⑤ 目から鼻へ

28

E ( ) で持ち直す

- ① 往生際 ② 一触即発 ③ 土壇場 ④ いまはのきわ ⑤ 勝負どころ

問二 次の文章の空欄に入る敬語を用いた言語表現として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、29 ～ 33。

29

A 何かございましたら、( )。

- ① ご一報してもらえますか ② 知らせられてください  
③ ご一報してください  
④ ご一報ください ⑤ ご一報になられてください

30 B あの方のことは、よく（ ）。

- ① 存じます
- ② 存じ上げています
- ③ お知りしています
- ④ 御覧しています
- ⑤ お知り合っています

31 C 今回のお申し込みは、残念ながら（ ）。

- ① 受け付けいたしません
- ② 受け付けかねません
- ③ お受け付けしません
- ④ 受け付けいたしかねます
- ⑤ 受け付けいたしかねません

D ( 1 ) ( 、 ) ( 2 ) ( ください )

32 1 ① 粗品ですが ② 厚志ですので ③ 珍品ですが ④ 良品ですので

⑤ 粗悪品ですが

33 2 ① ご確認 ② ご笑納 ③ ご査収 ④ ご高配 ⑤ 頂戴して

問三 次の a ～ e の条件に合うものを、次の各群の ① ～ ⑤ のうちからそれぞれ一つずつ選びな

さい。解答番号は、34 ～ 38。

a 勅撰和歌集

34

- ① 金槐和歌集
- ② 古今和歌集
- ③ 文華秀麗集
- ④ 万葉集
- ⑤ 山家集

b 歌物語

35

- ① 竹取物語
- ② 栄花物語
- ③ 保元物語
- ④ 平中物語
- ⑤ 曾我物語

c 説話集

36

- ① 義経記
- ② 浮世風呂
- ③ 古今著聞集
- ④ 菟玖波集
- ⑤ 落窪物語

d 鎌倉時代の歌人

37

- ① 在原業平
- ② 清少納言
- ③ 賀茂真淵
- ④ 花山院
- ⑤ 藤原定家

e 江戸時代に成立した物語

38

- 
- ① 無名草子
  - ② 古事記伝
  - ③ 宇治拾遺物語
  - ④ 和漢朗詠集
  - ⑤ 南総里見八犬伝

以上で問題は終わりです。